67144
旧番号
IAx(01)

(1)

高橋副総裁からの書簡等

(明治37〜38年)

金融史資料	
分類記号	I A x
整理番号	23(1)
資料名	松尾元総裁所蔵資料
保管容器	ロ108

研30009

通貨、金融史料	
分類	I Ba ヒソ
整理番号	い 27(1)
受入番号	い 3787
名称	松尾元総裁所蔵資料
備考	

① (1), (2), (3), (4), (5), (6), (7) 計7
② 計1
③ (1), (2) 計2
④ 計1
合計11.

①〜(1)

明治三十八年七月六日倫敦ニテ

①～(1)

明治三十八年七月六日倫敦ニテ

高橋是清

松尾總裁殿

拝啓米國ノ有力ナル理財家「ハリマン」氏本邦ヘ来遊致ス由ニ付其待遇方ニ関シ別紙写ノ通リ總理大蔵両大臣并ニ井上松方両伯ヘ上申致置候間其趣意ニヨリ尊臺ノ御配慮ヲ仰キ度同氏来着ノ上ハ先ツ好キ案内者ヲ付クルコト肝要ニテ是ニハ澁沢男及南貞助氏等ニ御相談相成レバ最モ適当ノ人物ヲ得ラルベキカ又暑氣ノ頃ナレハ差当リ日光行ニテモ御勧メ相成ルテハ如何ヤト奉存候澁沢男等ハ多分先年同氏ニ面会セラレタルコトト存候小生モ紐育ニ於テ同氏ニ面会シ過般電報中ニモ一寸申上置候如ク晝食ニ招カレ重立チタル実業家ニ紹介セシタル次第ニ付右御含ニ置キ被下度奉願候敬具

日本銀行

日本銀行

（同文～写）

明治三十八年七月六日倫敦ニテ

高橋是清

松尾総裁殿

拝啓 米国ノ有力ナル理財家ハリマン氏本邦ヘ来遊致スニ付其待遇方ニ関シ別紙写ノ通リ総理大蔵両大臣并ニ井上松方両伯ヘ上申致置候 其趣意ニヨリ尊堂ノ御配慮ヲ仰キ度同氏来着ノ上ハ先ツ好キ案内者ヲ付クルコト肝要ニテ是レハ渋沢男及南貞助氏等ニ依頼相成候ハヾ最モ適当ノ人物ヲ得ラルヘキカ又暑気ノ頃ナレハ差シ当リ日光行ニテモ御勧メ相成候テハ如何ヤト存候渋沢男爵ハ多分先年同氏ニ面会セラレタルコトヽ存候小生モ紐育ニ於テ同氏ニ面会シ過般電報中ニモ一寸申上置候如ク晝食ニ招カレ重立チタル実業家ト組合セシタル次第ニ付右御含ミ置キ被下度奉願候敬具

日本銀行

松尾總裁とハ氏

松尾日本銀行總裁が一昨十一日正午帝國ホテルにハリマン氏を主賓とし朝野の名士を招待し午餐會を開きたる由は前報の如くなるが尙其席上に於ける松尾總裁の挨拶及び之に對するハリマン氏の演説は左の如くなりしと

松尾總裁の挨拶

一寸御挨拶を致します皆樣……ハリマン君及御一行の諸君は先般我國に渡來せられ次て淸國及韓國の視察をなされ不日御歸國の途に上られんとの事に付御多忙をも不顧暫時の御光臨を願ひたるに御承諾を蒙りたるは光榮の至りと存し升且閣下及諸君の尊來を恭くし此盛會を見るに至りたるは大に感謝する所て御座り升

抑もハリマン君は米國の鐵道王と稱され又併せて大地主にして世界の經濟社會に於て最も重きを置かれて居らるゝ方で御座り升如此有力なる紳士が我國に渡來せられ親しく我商工業を視察せられたるは我經濟界の爲めに最も歡喜する所てあります

又特にハリマン君に申上ぐる儀は我日本銀行副總裁高橋是淸か米國に參りました時之れを厚遇せられ且諸般の便利を與へられたるとは拙者の深く感謝する所であります尙將來は益々親密に御交際を願ひ升終りに臨み杯を擧げハリマン君御夫婦並に其の御一行の諸君の御健康を祝したいと存します

ハリマン氏の演説

各閣下及日本の實業に關係ある諸君、我々が貴邦に來遊中貴君方が滿腔の赤誠を以て私共を厚遇せられ諸般の注意を辱したる事に就ては感謝の意を表したきも言語を以て之を言ひ盡くすとが出來ないと存します而して私共が東洋に參りまして以來貴國に於てのみならず他の國に旅行せる時迄も御注意を恭ふした譯であります我々は聊かも不便と面倒なくして旅行が出來且つ我々の安意と快樂の爲めに斯の如く周到なる注意を受けようとは固より期待せざりしことてあります

尙私の申上度事は諸君の間に經營の才と協同の能を明かに有せらるゝは讃歎せざるを得ざることであります而して又特に申上げたいのは今終りましたる大戰爭に於て万般を巧に處理せる政治家や陸海軍の將帥が諸君に示したる前例に倣ひ益々奮發せらるゝことが緊要なることを日本の實業界及財界を代表せらるゝ諸君に切に申上度いと存じます戰爭中其措置の宜を得たる結果は全世界の賞讃を博したる次第てござります彼等の敏捷謙讓は實に世界の歷史に前例なきことてあります依て諸君に於ても彼等の處置を蹈襲し他國人に對するに同一の正直なる手段を採りて淸廉敏捷に事を處し自己の肩上に轉下せる責任は其才幹を以て能く之に當るを得へく又將來に於ても進んで之に當るの覺悟ある實證を示され而して文明の戰爭を爲したる結果諸君の得たる地位をして其行動に依りて一層進捗せしめんことに努力せられんことは今後諸君の責任てあると信します

終りに臨んで一言謝辭を呈し且つ申上げて置きたいことは我々一行は皆日本國民に對し滿腔の熱情を以て歸國するとてあります加之我々は諸君の歡迎は啻に我々に對するものなるのみならず又寧ろ我邦人全躰に對して敬意を表されたる徵證なりしを承認することであります而して我々が此の相互の好意を永續せんことを欲するか如く我邦人に於ても然あらんことの希望を諸君の前に斷言して憚らさる所であります殊に我々は日本銀行の優遇を受くる權利なきに却つて我々を厚遇せられたるに就ては茲に一言謝意を申陳べて置かざるを得ません總裁閣下の御演説にある如く我々が日本銀行代表者たる高橋氏に與へたる少許の援助は眞に我一行の爲めに盡されたる其配慮と慇懃とによりて幾倍も報ひられたと云ふことであります

私は日本銀行總裁及其役員の健康を祝し且つ其の恒久の繁盛を祈り併せて將來我米國の諸銀行と親密の關係を持續せられんことを希望する所であります

の年月中英國中に於ける實際の金貨並に地
在高は全く増加せざりしを信ずべき理由あ

外濠全通
電氣鐵道
十一日より

登録商標
海上無雙
要獻盤

の年月中英國中に於ける實際の金貨並に地
在高は全く増加せざりしを信ずべき理由を
せり勿論前後

現時米國ノ鐵道王ト称セラレ且ツ有力ナル理財家ノ人タル「イ、エイチ、ハリマン」氏（E. H. Harriman, President of the Union Pacific Railroad）来ル八月十六日桑港発「サイベリヤ」号ニテ家族引連レ本邦ヘ来遊致候由同氏ハ米國ノ北部ヨリ南部ニ延長セル鐵道ノ大幹線ヲ管轄シ沿道ノ土地ヲ廣ク所有スルノミナラス其手腕ヲ以テ一般経済社会ヲ推量セシ経済上ニ大ナル仕事ノ目論見アル上ニハ必ス相談ニ與リ日本公債募集ノ如キモ隠然関知スル人ニ在リ此等ガ我カ政府及民間ニ於テ厚ク之ヲ待遇セラレ来遊ノ目的ヲ満足セシムル様有之度希望仕候従来我國ニテハ官歴アル外國人ニ對シテハ常ニ相当ノ待遇ヲ與ヘラルヽモ官歴ナキ人ニ對シテハ必ズシモ其ノ社交上ノ地位ニ相当スル待遇ヲ與ヘラレズ又國情ヲ知ラシムルコトニモ手段ノ至ラザル憾有之旁帰来者ノ口ニスル所ハ只天然ノ美ヲ賞スルニ止リ其漫遊ハ一時ノ興味ヲ與ヘタルモノトシテ了リ人物ノ交際又ハ経済上ノ関係ノ如ク脳裡

ニ帰スルノ利益ナキヲ怪マザルモノヽ如クニ窺ハレ申候今後益外国ト経済上ノ関
係ヲ密接ニスルノ必要アル折柄外国ノ資本家等ハ其経歴富豪ノ肩書ニ拘ハ
ラズ其ノ社交上ノ地位ニ応ジテ待遇セラレ且充分ニ観察ノ材料ヲ供
給セラレ候事肝要ト存候而シテ「ハリマン」氏ノ如キハ米国ノ社会ニ於テ
最高ノ階級ニ属スル人ニ有之候得バ宜敷御含ミ置キ被下度奉願候
又同氏ハ今後ノ日本ニ対スル事業ニ注目シ今回ノ来遊ヲ機会トシテ我ガ対
政府経済界ノ事情ヲ察スルノ意アル次第ニ候間単ニ一時的歓迎及
交際ニ止マラズ我国ノ事業及ビ人物ニ対シテ同氏ノ信用ヲ博スル様議事
御配慮相成候様此度ニ存候

①〜(2)

明治三十八年七月廿七日

在倫敦　高橋是清

松尾總裁殿

過日「サー、アーチスト、カッセル」ヨリ小生ニ向ヒ自分ハ日本産ノ狆ヲ取寄セ度キニ付周旋ヲ為シ呉レ間敷哉トノ依頼有之其内情ヲ承候ニ英國皇后陛下ハ兼ネテ非常ニ狆ヲ愛玩セラル、ヲ以テ先頃林公使ノ注意ニ依リ我　皇后陛下ヨリ之ヲ贈呈セラル、コトトナリ印度洋便ニテ牝牡数頭ヲ送ラレタルニ大概途中ニテ死亡シ無事ニ到着シタルハ僅カニ一頭ノミナリシ故皇后陛下ハ甚ダ遺憾ニ思召サレ其ノ相手トシ又種ヲモ取ルコトノ出来ル様今一頭手ニ入レタシトノ御希望ノ趣皇帝ヨリ「カッセル」ニ内話アリ且ハ此事ヲ日本皇帝ニ申出デラル、ハ好マシカラズトノ仰ニヨリ「カッセル」ハ小生ト懇親ヲ結ビシヲ幸ニ此事ヲ「カッセル」ヨリ小生ニ依頼スル事ニナリタ

トテ内情ヲ打明ケ相談有之候ニ付小生ハ心善ク之ヲ承諾致候然ル
ニ右買入及送届方ニ付テハ我 皇后陛下ヨリ御贈呈ノ節付添ヒ
来リタル宮内省ノ山下ト申ス人前回ノ経験モアリテ詳シク承知シ居ラル、
由ニテ聞ク所ニヨレバ最上質ノ狆ヲ手ニ入ルヽハ仲々容易ナラズ且船便ニテ
送ルニハ豫ジメ動揺ニ慣レシメ置ク等頗ル時日ヲ要シ又此冬ニ郵船會社
ノ船ニ托シテ送リ候事最モ便利ナルベク其レニハ早速準備ニ着手スルコト
必要ニ有之小生帰朝後ニテハ間ニ合ヒ兼ネ候哉モ測リ難ク候間 乍
御面倒尊臺ヲ煩ジ度奉願候 山下氏ハ目下帰航ノ途中ニテ此書状
ノ到着スル頃迄ニハ帰朝セラルベキニ付買入方送届方等總テ同氏ニ御相
談相成候様奉願候尤モ此事ガ英國皇室ノ所望ニ基クコトヲ世間ニ知
ラルヽハ好マシカラズ候ニ付山下氏ノ外ニハ決シテ漏ラシナキ様奉願候
我 皇后陛下ヨリ送ラレタル中無事ニ到着シタルハ赤斑ノ牡ニテ今回ハ特ニ
其ノ相手ヲ所望セラルヽ譯故赤斑ノ牝一頭ト序デニ牝牡一対ヲ加ヘテ送

[illegible]本存候[illegible]着ノ分ガ牝ナリシカ牡ナリシカ[illegible]有之候ニ付是レモ山下氏ニ御質シ被下度上候[illegible]到着ノ分果シテ牡ナレバ今回ハ牡一頭ト牝二頭ヲ送ルベキコト[illegible]御承知奉願候）

又「カッセル」ハ自分ニテ費用ヲ弁ズベシト申居候得共同様ニ英国皇室ニ関係セル事柄ニモアリ且ツ「カッセル」ハ従来ノ外債募集ニ隠然與ヲカセリ将来我國ノ財政ノ為メニ利益トナルベキ有力家ニ[illegible]同人ヲ[illegible]銀行ノ費用ヲ以テ同氏ノ所望ニ應シ置クコトト相成[illegible]

右件候敬具

①～(3)

明治卅八年八月一日

在倫敦 高橋是清

松尾總裁殿

拝啓

今度ニテ交戦中ノ外債募集モ最終ナランヿ萬禱致候偖テ拙者帰朝ノ儀願出候處媾和談判ノ模様分リタル迄出立見合可申旨政府ノ御命令ニ付何等御益ニ相立申間敷ト萬々存候得共暫時命ニ従ヒ滞在申事ニ致候就テハ自然今後「ロスチヤイルド」其他有力者ヨリ懇談ヲ持掛ケラレ候問題時トシテ大切ナル事柄ニ亘リ候事モ可有之其場合ニ媾和談判模様等心得居ラザレバ應對ノ調子ヲ失ヒ或ハ間ノ抜タル事共有之候テハ却テ面白カラザル成行ヲ見ルニ立至可申ト存シ昨日電信ニテ此事ニ関シ今後ノ情報願出候次第ニ御坐候

又近頃日本ノ好評判益々高クナルニ従ヒ種々ノ工夫ヲ以テ公衆ノ財利ニ

ヲ誘起シ私利ヲ謀ラントスル山師連ノ内外ニ輩出スル萌シ現ハレ
居候折角ノ日本好評モ此輩ノ為メ價値ヲ墜ス事ニ相成不申
哉ト懸慮致候此点ニ就テハ其筋ニ於テ中々御油断ノ成ラザル次第
ト奉存候

又興業銀行ノ如キ政府監督ノ下ニ係ル機関ヲ外國ニ紹介シ内
國ノ事業ト外資トノ連鎖トナリ媒介者トナル様手段ヲ廻ラスハ今日ガ
好機會ナラシカト存候而シテ此目的ニシテ好キ實行ノ手段ヲ得レバ
前ニ陳ベタル如キ山師連ノ有害ナル動作ヲ多少防止スルノ効力
可有之ト存候当地ノ有力者中ニモ拙者ト同感ノモノ不尠候ニ付紐育
滞在中六月六日付ヲ以テ上申致候件ニ関シ政府ノ御方針ニ付
昨日電信ニテ伺出候次第ニ御座候政府ノ御方針次第ニテハ或ハ
添田氏ノ出張ノ請求致候程ニ此際見込相立可申歟ト存候兼
テハ此事ニ付拙者帰朝ノ上愚見ヲモ申上其後ノ事ト存居候得共

帰朝ノ事モ漸ク近ヅクニ相成而カモ時節ハ到来スル場合ニ立成候
候最早電信ニテ時事ノ進行ヲ謀リ候ヨリ外無之事ト存候
「政府及日本銀行カ倫敦ニ所有スル資金ノ利廻リヲ計ル為メ今
日迄ハ英國大蔵省証券及國庫債券ヲ買入居候處兼テ申
上候通リ此種ノ証券追々品薄ニ相成候ニ付テハコンソル抵当ニテ
三十日期限ノ貸金ヲ為ス途ヲ開カズ候テハ他ニ安全ニシテ且利廻リ
善キ方法無之様被存候是ハ最モ安全ニシテ且利廻リ善キ方法ナルガ
故政府ニ於テ御再議相成候様切望致候事ニ御座候コンソルヲ抵当
ニ取ルニハ英蘭銀行ニ於テ一旦コンソルヲ借手ノ名義ニ書換候手續ニ
相成居候故英蘭銀行ニ對シ日本銀行代理店ノ代表者タルベキモ
ノヲ豫メ両名定メ置キ例ヘバ荒川巳次君吉井友兄ノ両名トスレバ此両人
名義ノコンソルト為シ之ヲ移動スルモノハ必ズ両人出頭シテ署名スルヲ要スル
コトシ若シ一名故障アル場合ニハ其者ノ委任状ヲ以テ署名スルコトニ相成

居候得共倫敦各銀行會社ガ其所有コンソルヲ取扱フニ慣用セル方法ニ御座候コンソルハ銀行會社ノ名義ニテ所有スルヿ出来不申仕方ニ相成居候故必ス個人ノ名義ヲ要シ此点ハ少々不便ナル嫌モ有之候得共政府ニ於テ御信用相成人ヲ二名選定相成候ハヽ他ニハ危險抔ハ不都合ト認ムル点無之候且利廻リモ大蔵省証券ヨリ幾分宜敷有之又三十日目即取引所ノコンソル精算日ヨリ次ノ決算日迄ヲ貸付ノ一期限トスルモノナルガ故若シ返金ヲ要スレバ必ズ三十日目ニハ現金ニテ戻ルモノニ御坐候而シテ右貸金ノ方法ハ其日ノコンソル市価全額ヲ貸付コンソルヲ我カ名義ト為シ萬一抵当流トナリコンソルヲ賣却シタル節不足ヲ生スレバ貸借ノ間ニ立ツル仲買商會ガ弁償ノ義務ヲ有スル仕組ニ有之候故此貸付方ハ國庫債券買入ヨリモ寧ロ安全ナル方法ニ依リ當業其筋ニ於テ篤ト御詮議相成度事希望ニ不堪奉存候

七月廿一日「カッセル」宅ヘ晩餐ニ招カレ夫ヨリ同人婦ト三人ニテ「オペラ」観物ニ参リ候時皇帝及皇后陛下モ観劇ニ見ヘサセラレ陪従ノ宮内大臣「ファーカー」卿拙者等ノ席ニ参ラレ候折「カッセル」婦ハ両陛下モ御来場ニヤト尋ネ同卿左様ナリト答ヘ候処「カッセル」婦ハ拙者ニ向ヒ陛下ニ謁見ヲ願テハ如何ト申候「ファーカー」卿モ其レハ宜敷カラントテ拙者ヲ促カシ立テ掛ケ候得共拙者ハ斯カル席ニテ初度ノ謁見ヲ為スハ相済マザル次第ナリト断リ同卿モ尤モナリトテ見合セ申候然ルニ右「ファーカー」卿ハ「パース」銀行重役ノ一人ニ有之同行ノ人ヨリ此話ヲ聞キテ甚ダ筋々ヘ申立其結果トシテ昨廿一日正午林公使ト同伴通常服ニテ謁見仰付ケラルベキ旨前日ニ外務大臣ヨリ通知有之其指定通リ「バッキナム」宮ニ出頭仕候処皇帝陛下ハ御一人ニテ林公使及拙者ニ謁見ヲ賜ハリ握手後貴下ハ重要ノ任務ヲ帯ビテ渡来シ居ル趣聞キ及ビタリト仰セラレ拙者ハ公債募集ノ為メ派遣セラレタル旨御答申上候処左ラバ公債ノ事ニ付話ヲ聞キタシトテ

皇帝自ラ林公使及拙者ノ為メニ席ヲ空メ御自身ハ大椅子ニ掛ケサセラレ拙者ニハ陛下ノ右手ノ椅子ヲ賜ヒ林公使ニハ正面ノ椅子ヲ賜ハリ候拙者ト皇帝トノ間僅ニ尺餘離レ居候林公使ハ皇帝ノ御言葉ニ對シ高橋ハ公債募集ノ好成績ヲ得テ喜悦致居ル旨申上ラレ候處陛下ハ甚ダ満足ナリト仰セラレ夫ヨリ公使ト拙者ニ向ヒ平和ノ見込如何ト御尋ネアラセラレ林公使ハ平和成立ヲ希望スル旨及「ウヰッテ」氏ガ露國ノ全權委員ニ任命セラレタルハ好徴ト考フル旨答ヘラレ候處陛下ハ日本ガ媾和ノ條件トシテ當然取得スベキモノヲ悉ク取得センコトヲ望ミ玉フハ當然ナラレト仰セラレ又話頭ヲ轉ジテ有栖川宮両殿下ハ今何處邊ニ居ラルヽヤトノ御尋ネアリ公使ハ両日前「ポルト、セツト」御通過ノ報ニ接シタル旨御答申上ラレ陛下ハ尚續ケテ両殿下ガ當國御渡來ニ付如何ニ思召サレタルナラレト仰セラレ候ニ付両殿下ハ當國朝野ノ懇誠ナル御待遇ニ深ク感動セラレタル旨御答申上候處陛下ハ頗ル御満足ニ渡セ

遇ニ深ク感動セラレタル旨御答申上候處陛下ハ頗ル御満足ニ渡セ

ラレ候最後ニ陛下ハ拙者ニ向ヒ何時マデ當地ニ滞在スルヤト尋ネサセラレ拙者ハ一ニ政府ノ指圖ニ従ヒ候事ヲ目下確知致兼候旨御答仕暫時ニシテ退出仕候當日ハ午前ニ勲章授與等アリ午後ニハ両陛下田舎ヘ出向カセラレ候筈ニテ御繁多ノ趣侍従ヨリ承リ居候

①〜(4)

謹啓今般別紙書翰總理大蔵兩大臣閣下ヘ呈上候ニ付御一覧置キ被下度又別封大蔵大臣並ニ井上伯宛ノ兩通ハ乍憚御銘々ヘ御届ケ方可然御願申上候敬具

三十八年八月十二日

在倫敦 高橋是清

松尾總裁殿

拜啓愈〻御清穆被為渉奉賀候然ハ昨年第一回外債
發行後我陸海軍連戰連勝ノ結果ハ歐米人ノ日本ニ對ス
ル觀察ヲ全ク一變セシメ候ノミナラス當初ヨリ日本外債ニ應募
シタルモノハ毎回孰レモ多少ノ利益ヲ得候所我外債ニ對スル
人氣至テ宜敷從テ日本ノ財政ニ歐米人ノ注意ヲ惹ク樣ニ相
成候此ニ於テカ大藏省編纂ノ財政年報（フヰナンシアルアンニアルリポート）ノ如キ大ニ効用ヲ為シ
戰爭中ニ不拘貿易ノ益ニ發展シ行ク事、壯丁ノ徵發ニ不拘産
業ノ益ニ進暢スル事等該年報ニヨリ的確ニ相分リ自然ニ
資本家ハ勿論一般公衆ニ迄彼等ノ日本觀ヲ一變セシメ候事
ハ屢次ノ募債成績ニテ能ク相分リ候即チ「ロスチャイルド」ノ如キ此ノ
景況ヲ實見シテ曰ク外國政府ガ倫敦ニテ一時ニ五百萬磅以
上ノ募債ヲ為シテ成功シタル例無之又從前發行公債ニ對
シ拂込未濟ノ内ニ同種ノ公債ヲ追發スルカ如キハ無理モ甚

シク従来ノ振合ニ依リ観察スレハ到底成功ノ見込ナキモノナリシ
ニ今回ノ日本募債ニ関シテハ悉ク従前ノ振合ニナキ好成績ヲ
呈シ殊ニ従来新ニ公債ヲ発行シテ其三分一以上一般投資者（パブリツクインヴエスター）
ノ手ニ皈シ候ハヾ非常ノ好成績ト同セラレ居候モノナリシガ今回日本公
債第三回第四回ノ成績ヲ見レハ発行当初ヨリ殆ント全部ヲ
挙ケテ一般投資者ノ手ニ帰シタルモノヽ如シ是ニヨリ之ヲ観レバ
倫敦ノ経済界ハ日本公債ノ為ニ遂ニ従来未曾有ノ新現象
ヲ呈シタルモノト謂ハザルヘカラス云々ト蓋シ斯ノ如キ好形勢ナルニ依
リ我国ノ将来ニ着眼シ種々ノ企画ヲ目論見ム者珍シカラサル
様ニ相成候然レ氏彼等ノ多クハ只目前自己ノ利益ノミヲ目的ト
スルモノニシテ我国ノ前途ヲ心配シ好意ヲ以テ斡旋スル者ハ暁星
ヨリ罕ナリト存候依テ心アル資本家ハ之ヲ憂ヘ相当ノ信用資
カナクシテ只一時射利ヲ目的トスル投機者輩ノ為スカマヽニ放

委シ置キ候ハヾ彼等ノ常トシテ私利ノミニ眩惑シ一般ノ公
益ヲ顧慮スルノ念ナキ故ニ遂ニ一般公衆ニ迷惑ヲ感セシムル
コトヲ醸生スヘク左候ハヾ折角日本カ今日マデニ獲得シタル好人
氣ヲ傷クルニ至ルベシト顰眉スルモノ尠カラス候抑々外資輸入ノ
機関トシテ興業銀行ヲ利用スルハ実際ノ効果甚多カルヘク特
別ノ法規ニ據リ設立セラレ政府監督ノ下ニ働ク興業銀行ニ
シテ外資輸入ノ衝ニ當ル以上ハ他ノ門戸ニヨリ其ノ目的ヲ達セムト
スル投機者ノ企畫容易ニ成効シ難キ事ニナル故ニ自然外資
輸入ノ取締モ出来候テ甚シク乱雑ニ陥ルノ憂モ減却スル譯
ト奉存候故ニ興業銀行ヲ利導シ之ヲ使用シテ外資輸入ノ
機関タラシムル様取計候儀ハ今日ニ於テ最モ適宜ノ策ト愚
存罷在候過般来國滞在中有力資本家ノ意向ヲ探リシ
頃ニハ同銀行ノ株主ニ外國人ヲ加ヘ重役ニモ外人ヲ入レ現今ノ如ク

五年間同行ノ株式ニ對スル政府ノ配当保証ハ能ク効ヲ奏シ故ニ之ヲ廢シ其ノ代リニ政府ヨリ同行ノ債券ニ元利ノ仕払保証ヲ為スコト肝要ナリトノ説最モ多数ナリシカ今ヤ英國ニ於ケル有力資本家就中パンミュールゴルドン一派ハ興業銀行ノ債券ニ政府ノ保証ト云フ事ハ最モ望シキ條件ナレトモ日本ノ議會ヲ通過セシムル等頗ル時日ヲ要スル事故其レハ跡廻シトシ先ヅ第一着トシテ同行ノ株金ヲ増加シ其ノ増株ヲ外國ニテ發行スヘシト主張スル様相成来タ即チ此レモ時勢ノ然ラシムル一進境ニ外ナラスト奉存候過日来會談数次彼等ノ意見ヲ聞クニニ興業銀行ノ債券ニ政府カ元利ノ支払保証ヲ為ストキハ外資ヲ引ク効果殆ド疑ナシ然レトモ此際同銀行ノ株ヲ増加シテ之ヲ外國ニテ發行シ其ノ一半ハ公衆ニ所有セシメ他ノ一般ハ「カススル」「ベアリング」「ロスチヤイルド」「クーンロエブ」等ノ如キ有力資本家ニ所有

セシメ候テ此等ノ新株主ハ期セスシテ興業銀行ノ利害関係者トナリ啻ニ日本ノ同情者トナル譯ナレハ自然同銀行ノ外資輸入作用ニ莫大ノ助力ヲ與フル事ニ相成其目的ノ達成殆ト間違ナシ興業銀行ハ特別ナル法律ニ依リ設立セラレ日本政府ノ特別監督ノ下ニ営業シツヽアルモノニ付其営業振リ等ハ信任シテ可ナルヘク外国株主ヲ代表スル外人重役ヲ置クカ如キモ今ヤ必要ナシ尤モ新ニ外国ニテ發行セントスル株数ノ全部ヲ挙ケテ右ノ有力資本家ニ所有セシムルコト出来サルニアラサレ共斯クテハ一般公衆ヲシテ其ノ日本観ヲ改良セシムル便ヲ失ハシムル譯ニ付半分ハ成ルヘク一般公衆ニ所有セシムルヲ尤モ可ナラン斯ノ如クニシテ得タル資本金ハ日本内地ニテ鐵道會社其ノ他確実ナル會社等ニ貸付ケ其ノ會社ノ営造物等ヲ擔保ニ提供セシメ候テ同銀行ノ貸付方確実ナラシメ追々相分リ来リ候テ遂ニ政府ノ保証ナク共同行

壽

ハ其債募ヲ外國ニテ發行スルヲ得ルニ至ルモ計リ難ク候然レトモ
只茲ニ氣遣ヒキハ興業銀行ノ株金ハ今日貳百五拾萬圓ニシ
カ拂込マレ居ラス日本ノ商法ハ在来ノ株金全部ヲ拂込マサレハ増
資ヲ許サヽル故ニ今日外國ニテ發行スル為ニ増株ヲ為サントスレ
ハ拂込未済ノ七百五拾萬圓ヲ此際拂込マシメサルヲ得ス且外
國ニテ發行ノ株ハ全額ノ拂込ヲ為サシムル仕組ニセザル可カラザルガ
故ニ斯クスレハ興業銀行ハ其増株ニヨリ一時内外ヨリ資金急
増シ為ニ其ノ運用方ニ困難ヲ感スルコトナキ哉否哉ノ点ナリ興業
銀行ノ増株ニ應募シ其ノ株主タラレトスル外國人ハ當初ヨリ其
拂込株金ニ對シ六分ヲ下ラザル配當ヲ期望致候ガ同銀行ガ
斯ノ如ク一時ニ急増シタル内外資本ニ對シテ果シテ初年ヨリ六分
ノ配當ヲ健全ニ為シ得ル哉否ハ大ニ氣遣シキ点ナリト申候故ニ
拙者ハ之ニ對シテ其ハ困難ニアラス今日ニ當リ興業銀行カ長

期ニテ年利七分弐ト七分五厘ニテ債付ヲ為スナラハ鐵道會社其他確実ナル會社等ハ悦テ借ル故ニ始メテ払込株金ニ対シ六分ノ配當ハ左マデ困難ニハアラス云々ト相答候處彼等ハ其点ニハ安心シタルモノヽ如ク相見ヘ候彼等又曰ク興業銀行ノ株ヲ増シ外國テ發行スルニハ五分ノ手数料及費用ヲ要ス又同銀行ノ外國ニ於ケル代理店ハ巴里斯（パリース）銀行香上銀行ヲ望ムト拙者ハ之ニ對シテ外國代理店ハ横濱正金銀行ニ限ル手数料ノ事ハ難件ナリ同行ノ株券ハ今ヤ弐拾五圓払込ノ處ニ参拾弐圓内外ノ市價ヲ保テリ故ニ同行ノ株主ハ増株ヲ平價ニテ發行スルサヘ餘程ノ特恵ト思フベキ道理ヲ有シ居ル處ニ更ニ手数料ヲ出シテ外國ニテ發行スル事ヲ肯諾セシメントスルハ頗ル無理ト謂ハザルベカラスト相答候處彼等ハ代理店ノ事ハ貴意ヲ諒ス増株發行ノ手数料及費用ノ事ハ成ル程御尤ナル故ニ

壽

其増株數ヲ平價ニテ同銀行ヨリ引受ケ引受人ノ責任ニテ之ニ多少ノ増打(プレミユム)ヲ付ケ以テ外國ニテ發行シ其増打ヲ得タル收益ヲ以テ手數料等ニ充當候樣致候可ナラシト申候

抑ミ興業銀行ヲ外資輸入ノ衝ニ當ラシムルコトニ關シテハ曩ニ本年六月六日付書面ヲ以テ陳述仕置候次第モ有之候處今ヤ御熟慮中ニアラセラレ候趣加之同銀行ノ定款ヲ見ルニ株金ノ拂込ハ毎回三十日前ニ株主ニ通知シ一度ノ拂込ハ貳拾五圓ニ限ルトアルカ如キ細密ナル規定モ有之旁以急遽ノ函電信往復ニテ何分ノ御沙汰ヲ促モ奉ルハ頗ル無理ト存候ニ付進テ彼等ト細目ノ取極メモ出來兼候條一ト先ツ彼等トノ談話ハ右ノ程度ニテ打切リ相別レ候

右ノ如キ事情ニ有之候故此上ハ法律定款等右ニ適應シ得ル樣甚シク改正ヲ爲シ或程度迄ハ一々總會ノ議ヲ煩ハ

ハサストモ簡便ニ重役會ニテ随時決議實行出来候様豫メ有効ナル決議ヲ爲シ置キ掛込金必要ノ程度、資金運用ヨリ生スル利益、將来ノ營業方針等ヲ取極メ政府ノ同意ヲモ得テ同行總裁渡邊親シク関係者ト談合セラレ候外無之ト奉存候

此段近況御報告旁愚見ヲ添ヘ如此奉得貴意候

三十八年八月十二日

頓首再拝

在倫敦

高橋是清

内閣總理大臣伯爵桂太郎殿閣下

大藏大臣男爵曾禰荒助殿閣下

追申前記ノ通認候後パンミュールゴルドン一派ヨリ興業

銀行ノ事ニ付話ヲ持掛ケ来候蓋シ彼等ハ現今時
機好熟シ居候ニ付何等ノ施設ヲ為スナラバ現下ハ最
モ好時機ナリ今後空シク時日ヲ遷延候ハヾ好機ヲ逸
シ候事ト氣遣ヒ居候モノヽ如ク相見ヘ候依テ事ノ成
否ハ姑ク措キ後刻電信ニテ事情稟申ニ及ブベキ見
込ニ有之候又拝

日本銀行

壽

①〜(5)

明治三十八年九月五日

高橋是清

松尾総裁殿

拝啓

独逸ニ於ケル我公債発行者ノ一タル「ウオーバーグ」商会ヨリ日本政府ノ注文ヲ可成独逸工業者ヘ与ヘラルヽ様致度旨先般来状有之候処殊ニ軍艦製造ニ付独逸ノ造船会社ヘ注文セラルヽハ独逸政府ノ甚タ喜ブ所ナルベク「キール」ノ「ゲルマニヤ、ウエルフト」ハ甲鉄艦ノ製造武装等ニ関シ他ノ競争者ト同一ノ条件ヲ以テ如何ナル注文ニモ応ズベキヲ信ズル趣書面ヲ以テ申出実際当局者ハ日本政府ガ今後果シテ外国ヘ製艦ヲ注文スルヤ否ヤ知ラザレドモ兎ニ角申出ノ趣ハ然ルベキ向ヘ伝達スベシト返答致置候右ノ次第何卒其筋ヘ御通し被下度奉願候敬具

①〜(6)

明治三十八年九月五日

高橋是清

松尾總裁殿

拜啓

「ポートアーサル」陥落以来英米ノ人心ハ一般ニ平和ノ曉ニハ日本ガ露國ヨリ償金ヲ收得スルコト當然ナリトノ思想ヲ抱キ居候處媾和談判ハ日本政府ガ償金ノ要求ヲ撤回セラレタルヲ以テ局ヲ了リタル趣八月三十日ノ新聞ニ確報出デ候ニ付市場ノ人氣ハ自然失望ノ感ヲ起シ日本公債ノ市價ニ不良ノ影響ヲ及スベシトノ豫想ヲ生ジ且ツ日本政府ハ償金ノ目當外レタルニヨリ更ニ外債ヲ起スナラントノ説米國ヨリ傳ハリ日本公債ニ對スル人氣銷沈ノ傾ヲ呈シ申候其際「ウエストミンスター」新聞及「ロイテル」通信社ノ記者小生ヲ訪問シ右新外債ノ風説及媾和ニ関スル意見ヲ

ヨ等ス候故軍隊ノ引揚等戦争ノ結末ニ要スル費用ハ現在ノ資金ニテ充分ナルコト 若シ今後更ニ外債ヲ起スコトアラバ従来ノ高利公債ヲ整理スル為ニ外ナラザルベキコト 此際平和ノ成立ハ満足スベキコトニシテ償金ノ有無ハ主要ノ問題ニアラザルコトヲ話シ差越「ウエストミンスター」新聞ハ三十一日ノ夕刊ニ小生ノ談話ヲ掲載シ「ロイテル」通信ハ同日夕刊及九月一日朝刊ノ諸新聞ニ掲載セラレ偶然人気ヲ引直スノ一助ト相成申候其後「セントラル、ニュース」通信社ノ記者参リテ話候ニハ株式仲買商ハ得意先ヨリ日本公債ノ買注文アルモ風説ノ如ク新債ノ募集ヲ見越シ得意先ノ利益ヲ慮リテ買注文ヲ控ヘシメ居タル處小生ノ意見新聞ニ出デタルニヨリ大ニ安心シテ買注文ヲ受クルニ至リタル趣ニ御座候實ハ夫レ程ノ深キ考ヘアリテ新聞記者ニ談話シタル次第ニハ無之畢竟些細ノ事ヨリ人気ノ変転スル一例ニ外ナラスト存候「ウエストミンスター」「タイムス」

「スタンダード」ノ三新聞別封ヲ以テ差上候間御高覧被成下候
々大幸ニ御座候敬具

①～(7)

明治三十八年九月六日　在倫敦　高橋是清

松尾總裁殿

拜啓
愈御清穆奉賀候然ハ今般平和克復御同慶至極ニ奉
存候償金ノ要求撤回サレ候儀ハ遺憾ナキニアラザルモ併シ元来今
回ノ戦争ガ償金ノ結果ヲ齎ラスモノニアラザル事ハ我國上下トモ開戦
当初ニハ異口同音ニ唱和致候説ナリシモ其後海陸連戦連勝ノ
結果英米國等ニテ土地割譲償金要求ノ当然ナルヲ説ク様ニ
相成候處我國民モ次第ニ其氣ニ相成リ近頃ニナリテハ土地割
譲ト償金要求トハ全世界ガ認メテ當然トナス動スベカラザル鐵案
ナルモノヽ如クニ信ジ居候モ翻テ歐陸ノ人氣ヲ顧ミレバ佛モ獨モ皆ナ
日本ガ若シ償金要求ヲ為スニ於テハ平和回復ノ見込ナシト最近ニ

至ル迄相信シ居候樣見受ケラレ候此ノ償金要求ノ撤回ニハ定
メテ色々ノ関係モ有之實ニ已ムヲ得サルノ結果ニ出デタルモノト拜察罷
在候御地ニテハ日本ガ最後迄強硬ニ償金ヲ要求候ハバ必ス目的ヲ達
シタルナランナトノ想像モ或ハ可有之候ヘ共當地上流社會ノ説ニ依レバ
日本ガ土地割讓ト償金トノ要求ヲ為スベシトハ露國ガ兼テ思ヒ設ケ
タル處ナリシモ彼レ露國ハ已ムヲ得ザル場合ニハ之ヲ應諾スルノ決心ヲ以テ全
權委員ヲ出シタルモノトハ思ハレズ露國ノ真意ハ極東ヲ久シク戰乱ニ沈淪
セシムルハ一般ノ平和ヲ害スルトテ世界ノ人心ニ大ニ悪感ヲ與ヘ居候故
ニ此際米國大統領ノ斡旋ヲ快諾シテ媾和委員ヲ派出シ人ヲシテ露國
ハ衷心平和ニ眷々タルモノナリト思ハシムルガ如キ態度ヲ取リテ世人ノ自國ニ
對スル悪感ヲ一掃シアワ能クバ其機ヲ利用シテ外債ヲ募集センモノトノ
二策ヲ主眼トシテ委員ヲ派シタルモノヽ如ク現ニ其證據ニハ全權委員
ガ途スガラ募債ノ瀨踏ヲ為シ米國着後尚ホ其ノ内談ヲ進メシト

シタルモ遂ニ佛米資本家ニ容レラレザリシニ依リ之ヲ断念シ今更ロヲ拭キ
知ラヌ顔ヲ装ヒ居ルノ事実ニ照シテモ蓋シ思ヒ半ニ過グルモノアルベシ露帝
及露廷ニ尚ホ勢力ヲ失墜セザル主戦黨ノ連中抔ハ償金ノ要求ヲ
断々乎トシテ拒絶候ハバ平和ノ調停成ルノ氣遣ナシト安意致シ居リ
タルモノヽ如ク相見ヘ候然ルニ料ラザリキ日本ガ大ニ譲リテ償金要求ノ撤回
ヲ為シ平和ノ解決ヲ円満ナラシメタルハ其ノ智慮、寛容、忍耐実ニ敬
服ノ外ナシト當地上流社會ヤ新聞等ノ日本ノ態度ニ對スル賞讃嘖々
タル有様ニ有之候米大統領ハ平和変定後一方ノ國民盛ニ其ノ平和
條件ニ謳歌スルハ其ノ平和會議満足ニ成功シタルモノニアラズ今回ノ如ク
日露両国トモ各々國内ニ於テノ満足セシメスト云フ解決ヲ告ケテコソ其ノ会議ガ
衡平ニ保タレテ円満ニ落付キタル事ヲ證據立ツルモノナレト申候趣ナルガ其レモ
一面ノ道理アル説ト被存候償金アルハ其ノ無キニ優ルハ固ヨリ申迄モ無
之候得共其レハ今更致方無之今日ノ場合償金ハ取レザルニシテモ

平和ノ克復ハ此上モナキ慶事ニ外ナラズ然レ氏定メテ色々ノ異説モ輩出シ容易ナラヌ心配ヲ煩ニ居候事ト拝察候又償金ハ取レザリシニシテモ種々施設経営ノ必要相起リ戦後ノ多費実ニ思ヒヤラレ申候併シナカラ「今日ハ実ニ國家非常ノ時ト云フ感念ヲ上下共ニ一日モ忘レズシテ尚戦争中ノ如ク警戒ヲ弛メズ奢侈ヲ斥ゾケ遊惰ヲ戒メ電信ニテモ貴意ヲ得候通リ此際原料品若クハ生産的資本ニモ属スル機械類ノ如キ物品以外ノ輸入品ニハ國家ノ力ヲ以テ干渉シ関税ヲ重課シテ其ノ輸入増進ヲ防遏スルノ方針ヲ立テ國家ノ生産力ヲ発展セシムルハ有益ナル事業ニ對スル資本ノ如キハ可成之ヲ供給スルノ道ヲ明ケ又欧米ノ観光客ヲ引付ケ好ニテ其ノ囊底ノ旅金ヲ費消セシムルノ設備即チ港湾ノ修築、公園ノ改良、旅館ノ新設、劇場ノ改良等ハ可成之ヲ充分ニスル様ニ導カザルベカラズト存候、甚シキニ就テハ政府ヨリ率先シテ自ラ成ス政府事業中殖産興業ニ縁遠キモノハ当分出来ル限リ之ヲ繰延ベ海陸

軍備ノ補充擴張ノ如キモ断チタル決心ヲ以テ之ヲ抑ヘ決シテ國力以上ノ施設ヲ為サザル様御注意無之テハ不相叶事ト存候而シテ必ラ御内話申上候通リ此際財政ニ関シテハ特別ノ御宸襟ヲ煩シ奉リ諸般ノ施設殊ニ陸海軍ノ設備ニ関シテハ果シテ國力ノ之ニ堪ユル哉否哉ト云フ点ニ付畏クモ常ニ関係ノ當局大臣ヲ御膝元ニ御召シニ相成親シク御裁断有之様不堪希望候要スルニ今後ハ一國ノ財力ヲ中心ノ基礎トシテ諸般ノ政策之ヨリ割出サルル様ニ相成決シテ騎虎ノ勢ニ餘儀ナクサレテ國力以上ニ奔馳セザル様御用意周到ナラザレバ不祥ノ言ニハ候ヘ共國家破産ノ悲境モ亦想像シ得ラレザルニアラズト及バズナガラ杞憂罷在候戦争中ハ兎モ角モ財政経済ノ舞臺ニ愈々困難ノ幕ヲ開演セラルルハ今後ナルベク候ニ付テハ申迄モナク尚一層ノ御尽力ヲ仰ギ度前ニモ申述候通リ御心労ノ程ハ幾重ニモ御察シ申上候敬具

明治三十八年十月十二日

松尾臣善

高橋副總裁殿

拜啓「ハリマン」氏歓迎ノ件ニ付御申越ノ次第モ有之候ニ付
早速政府當局并ニ澁澤添田等ノ諸氏ニモ申合ガイドハ
南ニモ相談致シ候得共餘リ營業的ノモノハ却テ貴賓ヲ遇
スルニハ如何敷ト存候間更ニ喜賓會ヘ交涉シ三名ノ通譯者
ヲ雇ヒ申候同氏ハ八月三十日頃ニ横濱着本行ヨリハ小生代理ト
シテ北島ヲシテ出迎ハシメホテル等萬端用意為致候二日鐵
道局ニテ氏ノ為ニ用意セル特別列車ニテ東京ニ入リ米國公使
館ニ宿泊ノ事ニ相成翌日小生ヲ訪問仕候五日藏相主人トシ
テ一行ヲ請シ元老并ニ政府諸公ニ紹介旁晩餐會有之

日本銀行

○奉清本郷ヨリ
松本大尉と[illegible]

六日ハ華族會館ニテ実業者紹介旁ノ晩餐會ヲ開ク筈ニテ
用意致置候處前日来市中不穏ト相成候ニ付俄ニ當日朝
一先延期ノ事トナシ其他商業會議所三井家等モ夫々催シ
アリシモ従テ中止ト相成一行ハ七日日光ヘ趣キ候付北島ヲ差遣ハ
シ接待方心配為致候此際日本鐵道ヘモ交渉シ候處臨時
機車ヲ發シ丁寧ニ接待有之十三日矢張リ日本鐵道會社及
鉄道局ハ好意ニテ臨時機車ニテ京都ニ行ク事ト相成尚北島
ヲモ遣シ候處十七日神戸ニテ兼テ同氏自ラ借リ置ケル「オハヨ」号
ニ乗リテ満韓視察ノ途ニ上ラレシトスルニ當リ北島ヲ招待致度旨
電報ニテ申越候付尚北島ヲ随行セシムルコトト致シ申(尚)候満
洲ニテハ款待方正金銀行ヘ依頼致候廿日大連着廿一日旅
順ニ至リ伊地知少將主人トシテ盛大ナル歡迎會開カレ同氏モ非
常ニ満足セラレシ候由廿四日北京ニ赴キ廿八日北京発三十日仁川着

本月四日釜山着致候此間モ兼テ京釜鐵道ニ交渉シ臨時機車ヲ用ヰ候事ニ致置候處同社ニテハ非常ニ注意シ歡迎致シ呉レ是又非常ニ満足セラレ候由ソレヨリ帰途山陽鉄道及九州鉄道モ臨時機車用意致置候處同氏ノ都合ニヨリ之ハ用ヰ不申長崎ヲ経テ神戸ヨリ又臨時機車ヲ以テ七日横濱ニ入リ八日入京十日井伯邸ニテ園遊會ノ催有之十一日午餐會ヲ催シ前回延期ノ結末ヲ付候処同氏モ非常ニ満足ノ意ヲ表シ小生ノ挨拶ニ対シ特ニ意ヲ用ヰタル答辞モ有之別紙ノ通リ候存御一讀被下度同夜米国公使館ニテ晩餐會及夜會開カレ本日ハ總理大臣主人トナラレ一會有之筈ニ~~御坐候~~然シテ明日發ノサイベリヤ号ニテ帰国ノ途ニ上ル筈ニ有之候又同氏ノ我國並ニ満韓滞在中時々電信發遣ノ事存非常ノ便宜ヲ與ヘ為ニ省令ヲ發シ候程ニ有之候右ノ外直接本行ニ関係ナキ催モ尚諸處

ニ有之候同氏滞在中不幸ニテ市中不穏ノ事情モ有之候得
共幸ニ都合ヨク相運ヒ同氏モ非常ニ満足致シ候様ノ次第ニ
候右一通リ歓迎ノ顛末申上度餘ハ拝光萬縷申上ベク候

草々頓首

③ ~ (1)

ハ如ク陳ベタリ

負担ノ頗ル重大ナルハ吾人モ等シク認識スル所ナリ然レドモ又吾人ニ各方面ニ亘リテ倍ニ励精事ニ當リ以テ其負担ニ應ゼントスルノ覺悟アリ猶之ト同時ニ前途ヲ悲観スヘキ理由モ存セザルナリ内外貿

日本銀行

JAPAN'S FINANCIAL POSITION.

FOREIGN LOANS AND TAXES.

AMENDED FIGURES.

Standard 7th Oct.

MR. TAKAHASHI'S STATEMENT.

Mr. Takahashi, Japanese Financial Commissioner, speaking yesterday to a representative of Reuter's Agency with reference to the financial outlook in Japan and the extent of the burden of the war, said:—

"We all realise that the burden is very heavy, but we are all prepared to meet it by redoubling our energies in every direction. At the same time there is no cause for pessimism. A most satisfactory sign is the continued growth of both internal and external trade, and when we consider the great impetus that will be given to our commerce in China and Korea we can confidently look forward to the future."

Asked concerning the figures put forward by Count Okuma, Mr. Takahashi replied:—

"The figures used by Count Okuma have, perhaps, been purposely made to look their worst for the purpose of inducing his hearers to still further effort. But they are quite misleading. He states that the interest on Japan's debt amounts roughly to £15,000,000, and in arriving at these figures he reckons the interest at 6 per cent. This is incorrect. Of the total amount of foreign loans outstanding, £22,000,000 alone bear 6 per cent. interest, £60,000,000 bearing 4½ per cent., and £10,000,000 4 per cent. Up to the present moment all the internal loans, including the five issues of Internal Exchequer Bonds, amount roughly to £100,000,000, of which only £20,000,000 Exchequer Bonds bear interest at 6 per cent., all the rest being 5 per cent.

"The foreign loans outstanding at the present moment amount to £92,000,000, of which £10,000,000 bear interest at 4 per cent., £60,000,000 at 4½ per cent., and £22,000,000 at 6 per cent. Roughly, therefore, the whole internal burdens of Japan amount to £100,000,000, of which £20,000,000 bear 6 per cent., and the remainder 5 per cent. interest. It is thus seen that the whole of Japan's debt up to the present moment is £192,000,000, and not £250,000,000, as Count Okuma states. Further, the total interest, instead of being £15,000,000, is only a little over £10,000,000.

"The burden of the war is, of course, heavy, but not heavier than we expected, and not heavy enough seriously to hamper the future peaceful development of the country. Count Okuma's statements about taxation are also erroneous. The taxation *per capita*, including all war taxes, is a little over ten shillings, and not twenty-four shillings. Count Okuma must have referred to the total expenses of the Government—ordinary and extraordinary—when he quoted these figures. The *per capita* share of the National Debt after the war amounts to £4, and not £5. I have no doubt that the *post bellum* financial scheme which is to be shortly presented to the Diet will adjust the liabilities of the country, so that they may not fall heavily on the population."

TOKIO, Oct. 6.

The session of the Associated Chambers of Commerce closed to-day. A resolution was passed in favour of memorialising the Government on numerous points calculated to advance and develop national trade, industry, and finance. The most prominent of these points are:—

The appointment by the Government of commercial agents and the institution of floating exhibitions with samples and a museum to visit foreign ports.

A Customs Tariff Union between Korea and Japan.

Opening of a Universal Exhibition.

Improvement and rapid construction of railways.

Retrenchment in Administrative expenses.

Establishment of a Japan and China Bank.

Preventive measures against the expansion of the currency.—Reuter's Special Service.

BRANDY FOR THE ISLANDERS.

EXPLORER AGAIN AT BOW-STREET.

The Bow-street magistrate yesterday continued the hearing of the charges against Mr. Thomas Caradoc Kerry, the explorer, who is accused of failing to deliver to the inhabitants of Tristan da Cunha certain books and other articles, which he had undertaken to convey to them on board his steam yacht Pandora.

Before resuming the hearing of the charge of larceny, Mr. Marsham disposed of a summons charging Mr. Kerry with unlawfully detaining a certificate of competency belonging to Stephen Newman.

Mr. Morgan Morgan represented Newman, and said that his client was engaged to serve as sailing master under Mr. Kerry, who did not hold a master's certificate. In the course of the voyage the two were on bad terms, and the complainant left the vessel at Capetown. Although repeatedly asked to return Newman's certificate of competency as a master, Mr. Kerry refused to do so. The result was that from April 13 to August 5 Newman could not get employment as a master, and he lost in wages between £60 and £70.

Mr. Elliott, who defended, said that when the complainant applied to the defendant for a berth he handed him his certificate. The defendant, however, handed it back to him a few days afterwards. When the complainant left the ship at Capetown the defendant forgot this incident, and thinking the certificate was at his bankers, said that he would take steps for having it forwarded to its owner. It was afterwards found at the back of a drawer in the complainant's locker, and at the next port it was posted in a registered letter addressed to the complainant at a sailors' home in London.

Francis Arthur Burlton, who said he was the son of a stockbroker, and educated at Winchester and Oxford, stated that he sailed on the Pandora as secretary and purser. On June 2, after the complainant had left the ship, he found the complainant's certificate, as described.

MIDSHIPMAN AS CHIEF OFFICER.

Eric John Hussey Freke, a son of Mr. Ambrose Dennis Hussey Freke, of Haddington Hall, Wiltshire, chairman of the Swindon bench of magistrates, said that he was formerly midshipman on the White Star Line, but joined the defendant on the cruise to Tristan da Cunha, and acted as chief officer of the Pandora. He corroborated the previous witness.

Cross-examined, the witness said he signed articles as chief officer, but he held no certificate.

Counsel.—Then you are chief officer without a certificate?—Absolutely (laughter).

You arrived at Capetown safely?—Yes, although the chief officer held no certificate (laughter).

At the close of the defendant's evidence, Mr. Marsham dismissed the summons, saying he did not believe that the certificate had been put behind the drawer by the defendant or any one acting under his instructions.

NO BABIES AT TRISTAN DA CUNHA.

On the hearing of the charges of theft made against Mr. Kerry being resumed, Mr. Elliott further cross-examined the Rev. Frank Stone. The witness supplied a more detailed list of the gifts sent to the islanders, and said that they included some tins of a patent food for infants.

Mr. Elliott.—Didn't you know as a fact that there was not a baby on the island, and that one has not been born there for three years?—No.

The value of the provisions would be under £10?—About that.

Replying to Mr. Muir, the witness said that though of small value in this country, the gifts would be of infinite value to the islanders, who had no means of getting such things.

COLONIAL OFFICIAL EXAMINED.

Mr. Hugh Bertram Cox, Assistant Under Secretary of State for the Colonies, produced the lease granted to Mr. Kerry in April, 1904, which licensed him to remove guano and other fertilising substances from three islands in the South Atlantic Ocean, named Inaccessible, Nightingale, and Gough Islands. The term was for three years, and the rent £75 a year. One of the covenants in the lease was that Mr. Kerry should cause all his vessels going to those islands to touch at Tristan da Cunha, and to carry his Majesty's mails and small quantities of goods for the inhabitants free of charge. On September 16 Mr. Kerry wrote from the Royal Colonial Institute that he would sail in the Pandora about the middle of November, and at his suggestion a paragraph was inserted in several newspapers stating that presents for the islanders would be carried free.

DESCRIPTION OF THE ISLANDERS.

On July 31 last Mr. Kerry wrote from the Royal Colonial Institute that he left England on December 18, 1904, and arrived off Tristan da Cunha on February 19, 1905. Proceeding to describe his visit to the island, Mr. Kerry wrote:—

"Immediately on our arrival a number of islanders

③ ~ (1)

本年十月七日発刊ノ英國スタンダード新聞紙上
ニ左ノ記事アリ

高橋氏ノ財政談

日本財務委員高橋氏ハ昨日「ロイテル」通信社特派員ニ
対シテ日本ノ財政概況及ヒ戰費負担ノ程度ニ関シ左
ノ如ク陳ベタリ

負担ノ頗ル重大ナルハ吾人モ等シク認識スル所ナ
リ然レモ又吾人ニ各方面ニ亘リテ倍ニ励精事ニ當
リ以テ其負担ニ應ゼントスルノ覺悟アリ猶之ト同
時ニ前途ヲ悲観スヘキ理由モ存セザルナリ内外貿

易ノ依然トシテ増進ノ状勢ヲ持續スルハ太ダ満足ニ措ヘザル善徴ニシテ清韓トノ通商貿易ニ一大利戦ノ加ヘラルヽニ至ルベキヲ思惟スルトキハ吾人ハ意ヲ安ンシテ前途ニ対シ望ヲ囑スルニ足ルベシ

大隅伯爵ノ発表セル負担額ニ関スル質問ニ対シ高橋氏ハ次ノ如ク答弁セリ

大隅伯ハ其負担額ヲ計上セル恐ラクハ故ラニ其最重額ヲ示シテ聴者ヲシテ更ニ一層ノ奮励ヲ誘発セシメントノ意ニ出テタルモノナラン然リト雖モ其數額ヤ實ニ誤解ヲ免レザルナリ伯ハ日本公債ノ利

予ヲ大約千五百万磅トスルモノナルカ此數額ハ六分ノ利率ヲ以テ算定セルモノニシテ是レ既ニ不正確ナリ外債ノ現在總額中六分利付ノモノハ二千二百万磅ノ三ニシテ四分半及四分利付ハ合計六千万磅ナリトス今日迄ニ内國債ハ五回ノ國庫債券發行ト共ニ大約一億磅ニ上レルガ其中六分利付ノモノハ獨リ二千万磅ノ國庫債券アルノミニシテ其他ハ凡テ五分利付ナリ

目下外債ノ現在高ハ九千二百万磅ニシテ其中四分利付壱千万磅四分半利付六千万磅六分利付二千二

日本銀行

百万磅トス去レバ日本ノ内債總額ヲ概畧壱億磅トシ其中六分利付ハ二千万磅ニシテ残餘ハ凡テ五分利付ナルヲ以テ今日ニ至ル迄ノ日本内外公債總額ハ實際一億九千二百万磅ニシテ大隅伯ノ言フ所ノ如ク二億五千萬磅ニハアラザルナリ且又利子支拂總額モ千五百万磅ニハアラズシテ僅ニ壱千万磅ヲ上ルコト少許ニ過キザルノミ

戰費負担ノ重大ナルハ勿論ノ事トス然リト雖トモ吾人ノ豫期セシヨリハ甚シカラザルノミナラズ將來吾邦國ノ平和的発達ヲ甚シク阻礙スル程重大ノ

モノニハアラザルナリ大隈伯ノ課税ニ関シテ陳ベタル所モ亦誤謬ニシテ國民一人ノ租税負担額ハ各戦時税ヲ合シ十志少餘ニシテ二十四志ニハアラザルナリ大隈伯ノ此計数ハ政府ノ經常費及臨時費總額ヨリ推算セルモノナルベシ又戦後國債ノ負担額ハ一人ニ付四磅ニシテ五磅ニハアラザルナリ予ハ不日帝國議會ニ提出セラル、戦後ノ財政計畫ハ能ク國家ノ負担ヲ安排シテ國民ニ過當ノ重課ヲ被ラシメザルベキヲ信ジテ疑ハザルモノナリ

日本銀行

日本銀行

③ ~ (2)

AGENCY OF
THE BANK OF JAPAN.

THE YOKOHAMA SPECIE BANK, LIMITED.
120, BISHOPSGATE STREET, WITHIN, LONDON, E.C.

拝啓
我国ノ戦時財政ニ関スル小生ノ談話ロイテル通信ニヨリ本月
三日ノ各新聞ニ掲載有之別封タイムス新聞差上候間御覧
被成度一方ニハ公債募集ノ談判ナ為シツヽアル通信者ヨリ
談話ナ求メラレ募集ノ害ニモナラズ又「ウソ」トモナラヌ様ニ
言ヒ廻ハスハ随分苦シキコトニ有之候、可然総裁及重役ヘ
御話シ被下度候　敬具

明治三十七年十一月十日　　高橋是清

検査局長
小野英二郎殿
坐下

本年十一月三日発兌の「倫敦タイムス」紙上に左の記事あり
ルーテル電報社特派員も十月三十一日即ち第三回新國庫債券募集
の初日に於て是募集額八百萬磅の内已に六百萬磅の申込あ
りたりとの電報昨日東京より到達せり電報に接したりと云ふ
尚應募期日ハ十一月七日迄なれバ申込額が募集額の数倍
に達するや疑なし
高橋日本銀行副總裁がルーテル電報社の代表者に對し今回
の戦争が自國に於ける財政上の状態に及ぼせる影響に関
して左の如く陳述せり
昨今日本政府に於て國庫債券の募集を開始したるが是
ハ既に前回の帝國議會に於て議決し裁可を經たるもの
なり而して其発行價格ハ九拾貳圓にして利率ハ年百分ノ

五なりとは目下我國民ハ熱心以て之が募集に應じつゝあるなり我國の財政を現下戦局の進行中なるにも拘らず甚だ満足ある状態にあり最近に余の接手しある報告の示す所によれば國内の生産力を今日に至るも未だ何等戦局の影響を蒙らずして輸出入の如きも共に著しき増加を示せり軍需品購入の為めに必ずや輸入の激増を来すべしとは何人と雖も當然豫想せし所なれども輸出も亦同時に増加すべしとは我邦人中最も楽觀的性向を有する人士すら尚能く想像し得ざりし所なり是れ實に日本國民が戦局の為めに心神を沮喪することなくして却つて必要なる軍資金の供給に各々後援を與へつゝあるの事實を証明するものに非ずして何ぞや今や我國に於ては上は至尊より下庶民に至るまで貴賤の別なく各自

一般に倹を守り費を節して更に痛苦を感ぜざるが如きは蓋し我國民情の特性なりとす されば我國民は各其堵に安んじて日常の業務に従ひ啻に一層業務を励み生産の増殖を圖るのみならず又各自奢侈品の購買を見合はすが故に之を以て輸出に轉用するを得べく殊に生絲の場合に於て然りとす又本年は稀有の豊作にして其増収高のみにても金額に見積るときは實に壹千萬磅の巨額に達すべしと云ふ

我帝國議會に向つて将に提出せられんとする豫算案の示す所に據れば我政府に於ては来年度中に軍事費として七千七百萬磅の支出を要すべきを豫期するものゝ如し是れ即ち本年度中に同一費途に要したる金額に對比すれば殆んど貳千七百萬磅の増額なりされば日本が曩

日本銀行

年に於ける戦役の為めに大に軍資金を充實せんと欲するの意あるや明白なり而して右七千七百萬磅の軍事費其一ハ更に我満州軍の兵力を増加し又一ハ戦艦を建造するの費途に充つるものとし従来小形の巡洋艦を既に我國内に於て之を建造しあり然るに我製鉄所の設備も愈々完成の期に近きあるを以て大形の戦艦の建造にも亦着手するに至るべし

我日本を以上の費途に要すべき一切の金額を自國内に於て能く調達することを得べければ目下外國の金融市場に之が供給を求むるの意更に之れなきなり況んや去る五月倫敦及紐育に於て募集しある公債の收納金中其大部分を現に今尚倫敦に残留せらるゝに於てをや尤も茲數ヶ月の後に至りて輸出入の差額を支拂ふ為めに海外

に於て資金を得るの必要起るべしと思はるゝも現今の處までは其要を見ず兎も角吾人は我日本が其必要とする資金を求めて得られざるが如き恐れは萬々之れなきを信ずるものなり日本國民が數年に亘りて必要なる一切の軍資を供給するに充分の餘力ありとは我國財政家の最初より確信せし所にして吾人と雖も今尚此自信を變ぜず實は開戰の當初に於て戰局の進行中兌換を停止するの可否に関して大に論議を盡くしたりしが結局兌換を停止するときは自然輸出入の貿易に重大なる影響を及ぼすべしとの見解勝を制して兌換停止の問題も終に否決せられたるは實に賢明の措置と謂つべし要するに吾人は我國の現状に對して十分の満足を表し且つ我國民が此大戰爭を飽く迄遂行せんとする意志と能力と

JAPANESE FINANCE AND THE WAR.

Reuter's Agency is informed that a telegram was received yesterday from Tokio stating that on October 31, the first day on which the subscriptions were opened for the new Exchequer Bond loan of £8,000,000, applications were received for £6,000,000. As the lists remain open until November 7 there is no doubt that the loan will be applied for several times over.

Mr. Takahashi, vice-president of the Bank of Japan, has made the following statement to Reuter's representative regarding the effect of the war on the financial position of his country :—

The Exchequer Bond loan, subscriptions for which have just been opened, was authorized by the last Parliament. The issue price is 92, and it bears 5 per cent. interest. It is being taken up with enthusiasm. Notwithstanding the war, our financial position is most satisfactory. My test information shows that up to date the war has had effect on the productive power of the country. Exports vell as imports show considerable increase. It was ally thought that the imports would increase owing e war purchases of the Government, but not the sanguine of us imagined that our exports would also se. This shows that the Japanese people are neither heir hearts nor their heads, but are putting their acks into the work of providing the money necessary for the war. It is characteristic of the feeling of our people that self-imposed economies are being practised by all classes from the Emperor downwards. The people are pursuing their ordinary avocations, and not only are they working harder and so producing more, but they are not purchasing luxuries, and the latter are therefore available for export. This is especially the case in regard to silk. This year, too, we have had a particularly good harvest, the money value of which is estimated at £10,000,000.

It appears that the estimates which are now about to be presented to Parliament show that the Government expects that £77,000,000 will be required for war purposes during the next fiscal year. This is an increase of something like £27,000,000 over the sum required for the same purpose during the present fiscal year. It is thus evident that Japan means to be amply furnished for next year's campaign. The increased expenditure provides for the despatch of largely-increased forces to Manchuria, and also for the building of warships. We have already constructed our own cruisers, but the building of larger warships will be commenced as soon as the steel works now nearing completion are finished.

Japan will be able to raise all the money necessary for these estimates in the country, and there is at present no intention of applying to foreign markets. We have still in hand, in London, the greater part of the money obtained by the London and New York loan of May last. It may be considered necessary at some future time to obtain money abroad in order to pay the balance of trade, but at present this is not required. In any case, we have no fear that Japan will not be able to obtain all the money she wants. Japanese financiers believed from the beginning, and we still believe, that the Japanese people have ample power to provide all that is required for some years. At the beginning of the war the question was seriously discussed of stopping the conversion of notes during the progress of hostilities, but this was wisely decided against as being calculated to affect the export and import trade seriously. We are perfectly satisfied with our position, and our best hopes have been more than fulfilled as to the willingness and ability of our people to carry the war through.

を有する点に関してハ吾人の希望を満たして尚大に餘

ある[illegible]認むるものなり

拜啓日本海ニ戰ノ大勝利慶賀ノ至ニ奉存候殊ニ外國人ハボルチック艦隊ノ東洋ニ出現セシ以来我國ノ為メニ頗ル海戰ノ結果ヲ懸念致居候事故其間ニ在ル小生ノ如キハ捷報ニヨリ一層ノ愉快ヲ覺エ

天皇陛下ノ御威徳ト當局ノ偉功ニ對シ誠意感謝致候次第ニ御座候

偖戰後ノ財政經濟ヲ整理經營スル計畫ノ一部トシテノ外資輸入ノ策ヲ講ズルハ最モ肝要ノ事ニ属シ候得共確実ナル實行方法ヲ立テ朝野ノ歩調ヲ揃ヘ且單ニ外資ヲ輸入スルノミナラズ其用途ニ就テモ違算ナカラシムル樣豫メ用意ヲ周到ニ致サゞレバ民間ニ於テ思慮浅キ企畫ヲ為シ遍ク外國ノ資本家ヘ相談ヲ持掛クルモノヲ生ジ其間ニハ小策ヲ弄スル外國ノ山師モ出テ実效ヲ擧グルコ

ト能ハズシテ徒ラニ我國ノ信用ヲ害スルニ至ルベキカト懸念罷在候
現ニ此頃モ東京電燈會社ノ代表者ト称スル内外人ヨリ僅カニ参百萬圓ノ社債発行方ヲ當地ノ資本家ヘ相談シ餘リ少額ナリトシテ拒絶セラレタル趣傳聞致候其相談ノ成功セザルノミナラズ外国資本家ヲシテ此ノ如キ少額ノ資金ヲ内地ニテ調達スル能ハズト思ハシムルハ甚ダ不利益ニ御座候左レバ政府ニ於テ確カト方針ヲ定メラルヽハ今日ノ急務ニテ苟モ適當ノ方法ヲ以テスレバ外資輸入必ズシモ難事ニアラズ而シテ其方法ハ左ノ三途ニアリト愚考仕候

第一策　平和克復後佛國及英米國ニ於テ政府公債ヲ発行シ其募集金ヲ以テ國庫債券等ヲ償還スルノ手段ニヨリ内地資金ノ緩和ヲ謀リ内地ノ資金ヲ潤澤ナラシメ鐵道會社等ノ如キ確実ナルモノヲシテ低利ナル抵当付債券ヲ内地ニテ発行スルノ機會ヲ得セシムルヿ、但シ内國債ノ償還ハ一時ニ行フノ意味

ニアラズ経済界ヲ攪乱セズシテ資金ヲ緩和シ得ル様適度ノ範囲ニ於テ漸次ニ行フノ意味ナリ、

第二策　日本興業銀行ノ債券ニヨリテ外國ノ資本ヲ輸入スルコト、但シ此策ヲ実行スルニハ該銀行ノ資本ヲ増加シ又外國人ハ相手トナリテ差支ナキ様ニ組織及執務ノ方法ヲ改革スルノミナラズ政府ニ於テ債券ノ利子仕払ヲ保証サルヽノ必要アルベシ

近頃英国政府ガ埃及ノ銀行ニ保証ヲ与ヘ加奈陀政府ガ加奈陀鐵道ノ債券ニ對シ保証ヲ為シタルハ確実ノ事業ニシテ未ダ廣ク公衆ニ知ラレザルモノヲ紹介シ投資ヲ誘ヒタル適例ナリ

第三策　日本興業銀行ヲ間ニ立テ鐵道會社等ノ抵当付債券ヲ外国ニテ発行スル手段ヲ設クルコト

右三策ノ中最モ低利ニ外資ヲ輸入スルヲ得ベキハ第一策ニテ先ヅ正味年四朱半位ノ見当ニ有之第二策ニヨレバ年五朱半第三策ニヨレバ年六朱

半位ノ見当ナルベクト存候金利ノ低下ハ経済ノ発達ニ缺クベカラザル要件ニテ國ニ起ルベキ事業アリ其企畫ニ對スル幇助監督ノ方法ハ如何ニ充分ニ相立チ候トモ金利高ケレバ其效果ヲ擧グル能ハズ明治二十四五年ノ頃金利ノ低落シタル爲メ事業ノ勃興シタルハ其一例ニテ當時ハ監督ノ方法充分ナラザリシヲ以テ恰好ノ適例トスル事能ハザルモ紡績及石炭業ノ基礎ハ其時ニ据ヘラレタル次第ニ御座候而シテ政府ノ外債募集金ヲ以テ内國債ヲ償還スレバ特ニ或ル會社ヲシテ資金ノ供給ヲ得セシムルト趣ヲ異ニシ一般ニ低利ナル資金ノ潤澤ニ均霑セシムルモノ故自然最モ有利有益ニシテ健全ナル事業ノ發達ヲ促ガスノ結果ト相成可申候

又内外資本ノ共通ト申ス事ハ此頃頻ニ世上ニ唱ヘラレ新聞紙上ナドニ屢々散見致シ候得共其意味ニ就キテハ聊カ誤解モ有之候様ニ覺エ候内國ノ需要ニ應ジテ外國ヨリ資金ノ流入スル代リ

候様ニ覺エ候内國ノ需要ニ應ジテ外國ヨリ資金ノ流入スル代リ

外國ノ需要ニ應シテ内國ヨリ資金ヲ流出セシムルノ境ニ至ラザレバ真ノ共通トハ謂フベカラズ詳言スレバ外國ニ出デタル有價証券ヲ需要供給ノ理ニ隨テ内國市場ニ買戻スノカヲ備ヘザル可カラズ英米佛独等ノ関係ハ即チ此ノ如キモノニ御座候單ニ外國人ヲシテ我ガ有價証券ヲ所有セシムルノミニテ彼等ガ之ヲ賣ランドスルトキニ買戻スノカナケレバ仮令其証券ハ民間ノ債券ニシテ外國人ガ我ガ事業ニ投資シタル観アルモ矢張リ借金國ノ地位ニ立ツモノニシテ資金ノ共通ヲ実現シタリトハ申シ難ク候真ノ資金共通ハ誠ニ望マシキ理想ニ相違無之候得共其境ニ至ルハ他日我ガ経済ト実力ノ大ニ発達シタル上ノ事ニテ目下徒ラニ架空ノ理想ヲ追フテ走ランヨリ実地ニ着々歩ヲ進ムルノ計畫ヲ為スノ外無之ト存候

右ハ御参考マデニ小生ノ意見ヲ大要上申致候ノミニテ委細ノ事情ハ書面ヲ以テ盡シ難ク若シ政府ニ於テ孰レトモ方針御決定相成候ハゞ

日本銀行

夫々実行ノ方法相立可申モ然ラザレバ外ヘ向テ充分ノ交渉ヲ試ムルコトモ出来兼候次第ニ付此際帰朝シテ詳細ノ御報告致候方國家ノ為メ利益ナランカト考ヘ電報ヲ以テ御命令ヲ仰ギタル次第ニ御座候此段御諒察奉願候　敬具

明治三十八年六月六日於紐育

高橋是清

總理大臣伯爵桂太郎殿

閣下

大蔵大臣男爵曾禰荒助殿

閣下

大藏大臣男爵曾禰荒助殿

閣下